

深 謝

出 雲 雅 志（経済学部）

二〇一六年の秋から二〇一七年の春にかけて、大連と広州、深圳の大学を駆け足でまわった。大連外国語大学、遼寧師範大学、東北財經大学、大連理工大学、広東外語外貿大学、中山大学、深圳大学を訪問する手はずを整えられたのは、どの大学にも「顔がきく」馬興国先生である。馬先生といっしょにいただけでも歓待された。よく知られた「偉い」先生にたいする畏敬の念からばかりとは思えない。権勢から自由でおだやかな馬先生の風格に、だれもが敬意をもたずにいられなかったからではないだろうか。

*

研究内容について馬先生と話したことはほとんどない。多くの著作のうち、わずかに宮田登・馬興国編『民俗』（『日中文化交流史叢書』第五巻、大修館書店、一九九八年）と蔡毅編『日本における中国伝統文化』（勉誠出版、二〇〇二年）に収められた「日本における中国民俗」を日本語で読み、ごく一部を知るだけである。馬先

生の研究についてはほかに書くひとがあるだろう。だが、専門外の者が読んでも、五〇〇ページあまりの『民俗』に書かれた一〇〇ページをこえる馬先生の序論「中日民俗交流と民俗研究」は、中国と日本それぞれの視点から二千年におよぶ日中民俗交流史をみわたり、歴史や文化ばかりか、宗教や思想、科学、芸術、政治、経済、風俗、地理にと広大な領域におよび、教えられることが多かった。

*

『民俗』の序論に馬先生は日中知識人の文章や詩を多く紹介している。「魯迅の日本と日本人民に対する忘れがたい真摯な感情」が表現されつくと指摘し引用した魯迅の次の詩もそのひとつである。どこかに馬興国先生の日本への想いと重なるころがあったのではないか。

「送増田涉君回国（増田涉君の帰国を送りて）一九三一年

扶桑正是秋光好、楓葉如丹照嫩寒。卻折垂楊送歸客、心隨東棹憶華年。

日本は今まさに秋のよい季節で、楓は赤い丹砂のように寒さの中に照り映えているだろう。枝垂れ柳の枝を折って帰る君を送ろうとするが、私の心は東に向かう船に従い、過ぎし日のことを思い出す。

*

馬先生とのつながりは、馬先生のさまざまなつきあいのなかの小さな部分にすぎない。けれども、身近に接した馬先生の心意気やときにユーモラスなふるまいから学んだことは少なくない。それは、ひとりの人間としてひとの信用をうらぎらないこと、そして、だれにたいしても謙虚であることである。馬先生は、千年のこころをもって日中知識人の批判的精神を受け継ぎ、その伝統をみずから生きようとしたのではないだろうか。馬先生にであう幸運にめぐまれたことをあらためておもう。馬興国先生にここから感謝の意をあらわしたい。

深謝（馬先生からのメールによく用いられていた言葉）。